

$(X, Y)'$ が pdf $f(x, y)$ をもつとする。このとき、 $X = x$ を与えたときの条件付き期待値

$$E(Y|X = x) = \int y f(y|x) dy$$

を x の関数とみて $g(x) = E(Y|X = x)$ とする。この $g(x)$ を X への Y の回帰関数という。一般に、 $(\mathbf{X}^{(1)'}, \mathbf{X}^{(2)'})'$ が pdf $f(\mathbf{x}^{(1)}, \mathbf{x}^{(2)})$ をもつとする。このとき、 $\mathbf{X}^{(1)} = \mathbf{x}^{(1)}$ を与えたときの条件付き期待値

$$E(\mathbf{X}^{(2)}|\mathbf{X}^{(1)} = \mathbf{x}^{(1)})$$

を $\mathbf{x}^{(1)}$ の関数とみて $g(\mathbf{x}^{(1)}) = E(\mathbf{X}^{(2)}|\mathbf{X}^{(1)} = \mathbf{x}^{(1)})$ とする。この $g(\mathbf{x}^{(1)})$ を $\mathbf{X}^{(1)}$ への $\mathbf{X}^{(2)}$ の回帰関数という。

まず、2変量正規分布の場合について回帰関数を考える。

$$\begin{pmatrix} X \\ Y \end{pmatrix} \sim N \left(\begin{pmatrix} \mu_1 \\ \mu_2 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} \sigma_1^2 & \rho\sigma_1\sigma_2 \\ \rho\sigma_1\sigma_2 & \sigma_2^2 \end{pmatrix} \right)$$

とする。このとき、 $X = x$ を与えたとき Y の条件付き分布は、

$$Y|X = x \sim N \left(\mu_2 + \rho \frac{\sigma_2}{\sigma_1} (x - \mu_1), \sigma_2^2 (1 - \rho^2) \right) \quad (9)$$

であるから、 X への Y の回帰関数は、

$$g(x) = \rho \frac{\sigma_2}{\sigma_1} x + \mu_2 - \rho \frac{\sigma_2}{\sigma_1} \mu_1$$

である。 $y = g(x)$ とすれば、2次元平面における直線の方程式である。

次に、 p 変量正規分布の場合について回帰関数を考える。

$$\begin{pmatrix} \mathbf{X}^{(1)} \\ \mathbf{X}^{(2)} \end{pmatrix} \sim N \left(\begin{pmatrix} \boldsymbol{\mu}^{(1)} \\ \boldsymbol{\mu}^{(2)} \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} \boldsymbol{\Sigma}_{11} & \boldsymbol{\Sigma}_{12} \\ \boldsymbol{\Sigma}_{21} & \boldsymbol{\Sigma}_{22} \end{pmatrix} \right)$$

とする。このとき、 $\mathbf{X}^{(1)} = \mathbf{x}^{(1)}$ を与えたとき $\mathbf{X}^{(2)}$ の条件付き分布は、

$$\mathbf{X}^{(2)}|\mathbf{X}^{(1)} = \mathbf{x}^{(1)} \sim N \left(\boldsymbol{\mu}^{(2)} + \boldsymbol{\Sigma}_{21} \boldsymbol{\Sigma}_{11}^{-1} (\mathbf{x}^{(1)} - \boldsymbol{\mu}^{(1)}), \boldsymbol{\Sigma}_{22 \cdot 1} \right)$$

であるから、 $\mathbf{X}^{(1)}$ への $\mathbf{X}^{(2)}$ の回帰関数は、

$$g(\mathbf{x}^{(1)}) = \boldsymbol{\Sigma}_{21} \boldsymbol{\Sigma}_{11}^{-1} \mathbf{x}^{(1)} + \boldsymbol{\mu}^{(2)} - \boldsymbol{\Sigma}_{21} \boldsymbol{\Sigma}_{11}^{-1} \boldsymbol{\mu}^{(1)}$$

である。ただし、

$$\boldsymbol{\Sigma}_{22 \cdot 1} = \boldsymbol{\Sigma}_{22} - \boldsymbol{\Sigma}_{21} \boldsymbol{\Sigma}_{11}^{-1} \boldsymbol{\Sigma}_{12}$$

である。

定義 3. 行列 $\Sigma_{12}\Sigma_{22}^{-1}$ は $\mathbf{x}^{(2)}$ への $\mathbf{X}^{(1)}$ の**回帰係数の行列** (matrix of regression coefficient) である.

同様に, 行列 $\Sigma_{21}\Sigma_{11}^{-1}$ は $\mathbf{x}^{(1)}$ への $\mathbf{X}^{(2)}$ の回帰係数の行列である.

定義 4. X_{q+1}, \dots, X_p を与えたときの X_i と X_j の**偏相関係数** (partial correlation coefficient) は,

$$\rho_{ij \cdot q+1, \dots, p} = \frac{\sigma_{ij \cdot q+1, \dots, p}}{\sqrt{\sigma_{ii \cdot q+1, \dots, p}} \sqrt{\sigma_{jj \cdot q+1, \dots, p}}}$$

である. ただし,

$$\Sigma_{11 \cdot 2} = \Sigma_{11} - \Sigma_{12}\Sigma_{22}^{-1}\Sigma_{21}$$

の (i, j) 要素を $\sigma_{ij \cdot q+1, \dots, p}$ とかき**偏共分散** (partial covariance) とよび, 特に $\sigma_{ii \cdot q+1, \dots, p}$ を**偏分散** (partial variance) という.

—— 単相関係数 ——

共分散行列が

$$\Sigma = \begin{pmatrix} \sigma_{11} & \cdots & \sigma_{1p} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \sigma_{p1} & \cdots & \sigma_{pp} \end{pmatrix}$$

で与えられるとき, $Cov(X_i, X_j) = \sigma_{ij}$, $V(X_i) = \sigma_{ii}$ である. このとき, $V(X_i) = \sigma_i^2$ と表し, 単相関係数^aを

$$\rho_{ij} = \frac{Cov(X_i, X_j)}{\sqrt{V(X_i)}\sqrt{V(X_j)}} = \frac{\sigma_{ij}}{\sigma_i\sigma_j}$$

とすると,

$$\Sigma = \begin{pmatrix} \sigma_1^2 & \cdots & \rho_{1p}\sigma_1\sigma_p \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \rho_{p1}\sigma_p\sigma_1 & \cdots & \sigma_p^2 \end{pmatrix}$$

とも表せる.

^aこの後に学ぶ重相関係数と対比して単相関係数と呼ぶ.

単相関係数 ρ_{ij} は -1 以上 1 以下の値を取り¹, $\rho_{ij} = 0$ は X_i と X_j が無相関であることと同値である. また, X_i と X_j が独立ならば, $\rho_{ij} = 0$ であるが, 一般にその逆は成り立たない. しかし, \mathbf{X} が p 変量正規分布に従う場合には, X_i と X_j の (単) 相関係数が 0 であることと X_i と X_j が独立であることは同値である (定理2 参照).

偏相関係数を単相関係数を用いて表すことを考える.

$$\begin{pmatrix} X_1 \\ X_2 \\ X_3 \end{pmatrix} \sim N \left(\begin{pmatrix} \mu_1 \\ \mu_2 \\ \mu_3 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} \sigma_{11} & \sigma_{12} & \sigma_{13} \\ \sigma_{21} & \sigma_{22} & \sigma_{23} \\ \sigma_{31} & \sigma_{32} & \sigma_{33} \end{pmatrix} \right)$$

とする. このとき,

$$\rho_{12 \cdot 3} = \frac{\sigma_{12 \cdot 3}}{\sqrt{\sigma_{11 \cdot 3}} \sqrt{\sigma_{22 \cdot 3}}} = \frac{\rho_{12} - \rho_{13}\rho_{23}}{\sqrt{1 - \rho_{13}^2} \sqrt{1 - \rho_{23}^2}}$$

であることを確認しよう.

$$\begin{aligned} \Sigma_{11 \cdot 2} &= \Sigma_{11} - \Sigma_{12} \Sigma_{22}^{-1} \Sigma_{21} \\ &= \begin{pmatrix} \sigma_{11} & \sigma_{12} \\ \sigma_{21} & \sigma_{22} \end{pmatrix} - \frac{1}{\sigma_{33}} \begin{pmatrix} \sigma_{13} \\ \sigma_{23} \end{pmatrix} (\sigma_{31}, \sigma_{32}) \\ &= \boxed{\text{読者の演習}} \\ &= \begin{pmatrix} \sigma_1^2(1 - \rho_{13}^2) & \sigma_1\sigma_2(\rho_{12} - \rho_{13}\rho_{23}) \\ \sigma_1\sigma_2(\rho_{12} - \rho_{13}\rho_{23}) & \sigma_2^2(1 - \rho_{23}^2) \end{pmatrix} \end{aligned}$$

以上から,

$$\begin{aligned} \rho_{12 \cdot 3} &= \frac{\sigma_1\sigma_2(\rho_{12} - \rho_{13}\rho_{23})}{\sqrt{\sigma_1^2(1 - \rho_{13}^2)} \sqrt{\sigma_2^2(1 - \rho_{23}^2)}} \\ &= \frac{\rho_{12} - \rho_{13}\rho_{23}}{\sqrt{1 - \rho_{13}^2} \sqrt{1 - \rho_{23}^2}} \end{aligned}$$

定理 5.

$$\rho_{ij \cdot q+1, \dots, p} = \frac{\rho_{ij \cdot q+2, \dots, p} - \rho_{i, q+1 \cdot q+2, \dots, p} \rho_{j, q+1 \cdot q+2, \dots, p}}{\sqrt{1 - \rho_{i, q+1 \cdot q+2, \dots, p}^2} \sqrt{1 - \rho_{j, q+1 \cdot q+2, \dots, p}^2}}$$

定理5より, 単相関係数 $\{\rho_{ij}\}$ を用いて, 再帰的に $\{\rho_{ij \cdot p}\}$, $\{\rho_{ij \cdot p-1, p}\}$, ..., $\rho_{12 \cdot 3, \dots, p}$ を計算することができる.

¹一般に単相関係数 ρ_{ij} は, -1 以上 1 以下の値をとる. p 変量正規分布を考える場合には, 共分散行列が正定値対称行列でなければならないため $-1 < \rho_{ij} < 1$ とする. 退化正規分布を含めて正規分布を定義する場合には $-1 \leq \rho_{ij} \leq 1$ で良い.

3.7 演習問題

問1 $(X, Y)'$ が平均ベクトル $(0, 1)'$, 共分散行列

$$\Sigma = \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & 4 \end{pmatrix}$$

の2変量正規分布に従うとする. このとき, X への Y の回帰関数として正しいものはどれか. 次の ① ~ ④ のうちから適切なものを一つ選べ.

① $\frac{1}{4}x - 1$

② $\frac{1}{4}x - \frac{1}{2}$

③ $\frac{1}{2}x + 1$

④ $x + 1$

問2 確率ベクトル $\mathbf{X} = (X_1, X_2, X_3)'$ が平均ベクトル $\boldsymbol{\mu}$, 共分散行列

$$\Sigma = \begin{pmatrix} 1 & 0.4 & 0.8 \\ 0.4 & 4 & 0.4 \\ 0.8 & 0.4 & 4 \end{pmatrix}$$

の3変量正規分布に従うとする. X_3 を与えたときの, X_1 と X_2 の偏相関係数 $\rho_{12.3}$ はいくらか. 次の ① ~ ④ のうちから最も適切なものを一つ選べ.

① 0.12

② 0.18

③ 0.21

④ 0.38

問3 以下の文章は、式 (9) に関連する文章であり、T. W. Anderson の *An Introduction to Multivariate Statistical Analysis, 2nd edition* の p.37 からの引用である²。

The mean of this conditional distribution increases with x when ρ is positive and decreases with x when ρ is negative. It may be noted that when $\sigma_1 = \sigma_2$, for example, the mean of the conditional distribution of Y does not increase relative to μ_2 as much as x increases relative to μ_1 . [Galton (1889) observed that the average heights of sons whose fathers' heights were above average tended to be less than the fathers' heights; he called this effect "regression towards mediocrity."]

この文章から読み取れることとして、次の ① ～ ④ のうちから最も適切なものを一つ選べ。

- ① $\rho > 0$ のとき、 x とともに条件付き期待値 $E(Y|X = x)$ は減少する。
- ② $\rho < 0$ のとき、 x とともに条件付き期待値 $E(Y|X = x)$ は増加する。
- ③ $\sigma_1 = \sigma_2$ のとき、 $x - \mu_1 = k > 0$ とすると $E(Y|X = x) - \mu_2$ は k より小さくなる。
- ④ 父親の身長が（父親の）平均身長より高いとき、その息子の身長は父親の身長よりも必ず大きくなる。

²使用している記号に若干の変更あり